

〈共同研究報告〉

共同研究「出版と学芸ジャンルの編成と再編成」報告(一)

鈴木貞美

序にかえて——研究会経緯

この小特集は、国際日本文化研究センターで二〇〇三年から二〇〇六年にかけて(一期と一年)行った共同研究「出版と学芸ジャンルの編成と再編成」(代表者、鈴木貞美の報告、第一回である。このような形で、研究成果報告を行う理由を明らかにし、序にかえることにしたい。

この共同研究は、「学芸」「文学」「芸術」「歴史」など、今日でも用いられている学術の基礎概念の形成過程についての研究を重ねるうちに、概念の流通と定着を知るには、教育研究制度のみならず、教科書類や出版ジャーナリズムへのアプローチが不可欠であり、また、そこにおけるジャンルの分類も、大きくかかわっていることに気づいたことに端を発している。それら基礎的な諸概念も、西欧近代の概念を日本人が受けとり、それまでの伝統的な意味を大きく組

み替えたり、新たに造語したりしてつくられたことは、よく知られている。が、土台になった伝統的な概念のあいだの関係、すなわち編成、いいかえるとシステムないしはネットワーク(conceptual system or network)には、それを支えてきた価値観があり、また歴史的な条件が作用して、西欧近代のそれとは異なる独自の概念とその編成が形づくられたことについては、案外、見過ごされてきた。当然、そのシステムないしはネットワークの一角を担う個々の概念も、西欧のそれとは、その意味をたがえている。徳川時代後期の知のシステムが、どのような編成をもっていたかを了解してこそ、明治期における新概念と、その編成の形成過程、そこに働いた力や価値観を明らかにすることができるのである。そして、徳川時代後期の知のシステムには、学問や観念の諸制度だけでなく、出版における各ジャンル意識も密接不可分にかかわっているはずである。

そこで、近年、大きく進展している徳川時代の出版史研究の成果

を活かし、それが明治期に、どのように再編されたのかを明らかにし、それを通じて出版ジャーナリズムにおける知のシステムの組み替えを明らかにしようとする目論みなのである。明治期における出版界の編成については、すでに日文研における雑誌『太陽』をめぐる二期六年にわたる共同研究のなかで、その版元である博文館が、いかにして出版、流通およびその周辺全般にわたるコングロマリットと呼ぶにふさわしい巨大な組織をつくりあげたかについての説明に着手していた。また、博文館出版物には中学生および中学に通えない人びとのための叢書類が多くあり、ジャンルの分類の変化については、それらに目配りしてきたことも大きい。

明治期出版物の動向をさぐる手がかりとしては、浅岡邦雄氏（現・中京大学文学部・准教授）の協力により、一八八七年を前後する時期に、書生を多く顧客とする「新式貸本屋」、「共益貸本社」の刊行年の異なる目録三点を得ていた。その内容の変化を分析することによって、英書など洋書の輸入、流通をふくめて、明治前半期の出版物のあらましがわかると予想された。

この研究を日文研の正規の共同研究会として発足させるにあたって、それ以前、三年間ほどの準備期間を置き、ほぼ毎月、私的な研究会を東京で継続的に行った。その効果もあり、共同研究会への参加希望者は発足時から五〇人を超えた。そして、研究会では、ほぼ毎回、門外漢の目を見張らせるすぐれた内容の報告が行われた。それについては参加者の誰もが認めるものと思っている。しかし、にも

かわらず、共同研究会はなかなか所期の目的に向かって進まなかった。

当初より、これらの作業がまとまりを見せるには、二期六年の共同研究会を重ねることが必要と判断していたが鈴木貞美「日文研共同研究『出版と学芸ジャンルの編成と再編成』について」、『日文研』第32号、二〇〇四年九月を参照されたい）、三年を経過した時点で、困難が大きすぎることを思い知らされた。その理由は多々あるが、つまるどころ、以下の三点に要約できるだろう。

第一に、現在の出版史研究が徳川時代と明治期以降とに分断されたまま、両者にまたがる通史的な研究をとりくむ研究者が少ないこと。

第二に、出版史研究において、ジャンル形成に問題意識が育っていないこと。

第三に、徳川時代から明治期をとおした通史的関心、また学際的な関心を共有しえたとしても、個々の研究者にとつて、共同研究会が他の分野、時代の新しい研究を勉強する場にはなつたとしても、自ら通史的、あるいは学際的な研究を行うには至らない場合が多いこと。

要するに、問題意識は共有しえたとしても、個々人が所属する学会の枠を超えるような成果を出しにくいということである。実際のところ、共同研究会でなされた報告のうちにも、はじめから所属する学会の機関誌や講座ものなどに論文を掲載することを予定したも

の、また、報告後に学会誌等に掲載されたものも何本かあった。それらの論文執筆の準備のために共同研究会の討議が役に立つなら、それはそれでよいと私は考えている。それゆえ、そのためのルールづくりも行いながら、研究会を進めた。

三年を経過して、一年延長期間を置くことにしたのは、別の大きな理由もあった。日文研に客員教授としてお招きした武漢大学中国伝統文化研究中心副所長の馮天瑜教授との協力関係が進み、また国内公募の共同研究会、静岡文化芸術大学の孫江助教授(当時)を代表者とする「近代東アジアにおける知的空間の形成——日中学術概念史の比較研究」(二年)が進行しており、二〇〇六年には、馮教授、孫江助教授と連携した国際研究集会を開く計画が、日文研の劉建輝助教授の尽力によって実りそうだったからである。その国際研究集会に向けて、共同研究会を運営すれば、所期の目的に近づけるのではないかと考えたのだった。

先にふれた『共益貸本社』目録の分析は、分科会形式をとって進行していた。だが、共同研究会も、手間のかかる目録の分析も進捗は、はかばかしくなかった。

それにもかかわらず、東アジア近代における概念の組み替えに目的を絞った、日文研第三一回国際研究集会「東アジアにおける学芸史の総合的研究の継続的発展のために」(二〇〇七年三月)は成功した。論議を通じて、ドイツでさかんな概念史研究を参照しつつ、しかし、東アジアにおけるそれは、西欧近代とは価値観の異なる伝統

的概念が、西欧近代の概念を受けとることによって、組み替えられてゆく過程であり、また歴史的条件が日本、中国、韓国それぞれに異なることから、ヨーロッパにおける概念の組み替えよりも、はるかに複雑な過程をたどっていること、また、それを明らかにするには、一つの問題の変遷を追うことに終始することなく、他の概念との関係、すなわち概念編成全体の組み換えを明らかにすることが肝要であること、それによってこそ、ある一つの基礎概念の変遷も明らかになるという相互にささえあう関係であることをはっきりさせることができた。

そして、西欧近代概念の多くの翻訳語が一九世紀半ばの上海でつくられ、それが幕末から明治初頭の日本で铸なおされ、その铸なおされたものが、留学生によって中国本土に移植されるという過程、上海でつくられた新概念は朝鮮半島に直接、渡ったものもあるが、その編成全体の定着は日本の統治下で進んだこと、したがって、近代における諸概念およびその編成を明らかにする研究は、中国、韓国、日本の研究者が、それぞれの国内資料の発掘と分析を進めるだけでは不十分であり、全体の解明には、少なくとも三国の研究者間の連携が不可欠であること、なども明らかにになった。なお、この研究集会には、台湾からの参加者も得ることができた。

国際研究集会の参加者たちは、それぞれに課題を持ち帰り、各自の研究を発展させるとともに、この研究の重要性を国内で訴えた。それによって、二〇〇六年冬に武漢大学中国伝統文化研究中心、二

〇〇七年春には日文研、また二〇〇七年秋に北京大学で、と連続して国際研究集会を開催しえた(武漢、北京は人間文化研究機構の連携研究「文化の往環」の一環として行った)。その都度、新しい成果の報告を得、また新しいメンバーの参加を得て、研究の国際的な展開に確かな手ごたえを感じるようになった。そして、二〇〇七年冬には、武漢大学中国伝統文化研究中心の研究プロジェクトが、中国の人文・社会科学分野で四〇採択される国家プロジェクトとして認定された。また北京大学、北京外国語大学の中枢的な研究者たちも、この国際共同研究への参画を表明してくれている。

韓国においては、前・韓国日語日文学会会長である高麗大学の李漢燮教授が、これまで、ご自身が蓄積してこられた近代日本語語彙の成立に関する先行研究のデータベースを提供することを快く承諾された。それをベースにして、共同して補填を行い、二〇〇七年一月に日文研のサーバーに立ち上げることができた(なお、これは鈴木が代表者となり、日文研のメンバーを研究分担者として申請した日本学術振興会の科学研究費補助金(四年間)が、二〇〇七年度に採択されたことよって、はじめて可能になったことである)。

実際のところ、この種類の研究には、日本語研究者の手で行われてきたもの以外にも、各分野それぞれに行われてきた成果がかなりある。しかし、それらを相互に参照しうるツールは、これまで皆無であった。さらに概念史および概念編成史の先行研究を加えたデータベースを公開し、中国、韓国、日本などの関心をもつ研究者に、

欠を補う投稿を募る方式をとる。国際的なデータを国際的に参照可能にすることを目指した、文字通り国際的、学際的な研究ツールの形成である。その作業の進捗が、東アジアにおける概念の国際的な伝播と定着の過程を明らかにする研究を促進し、より確実なものとし、その進展が、さらにデータベースを豊かなものにするという関係である。

このように進みゆくであろうことは、二〇〇六年冬の武漢における国際シンポジウムの際に、中国の研究者と論議を重ねたときから予想された。それゆえ、日文研では、二〇〇七年度から研究課題を「東アジアの知的システムの近代的編成過程」と改め、新たな共同研究を発足させたのである。その研究には、繰り返しだが、各概念についての研究はもちろん、出版メディア全般についてのアプローチも必要となる。それゆえ、新規の共同研究会は「近代東アジアにおける知的空間の形成——日中学術概念史の比較的研究」と「出版と学芸ジャンルの編成と再編成」との二つの共同研究会を文字通り統合して行うことにした。

共同研究会「出版と学芸ジャンルの編成と再編成」は、その期間においては所期の目的に到達することなく、参加者個々人が多岐にわたる個別研究の成果をあげるにとどまったといえよう。しかし、二〇〇七年度に発足した「東アジアの知的システムの近代的編成過程」をめぐる共同研究会の発足そのものが、「出版と学芸ジャンルの編成と再編成」の発展であり、その成果といつてよい。

それゆえ、共同研究「出版と学芸ジャンルの編成と再編成」については、参加者各自の研究がまとまり次第、逐次、本誌に小特集を組み、成果報告とすることにした。その内容は多岐にわたり、ましまりを見せることはないが、いずれも、今後の各分野の研究に寄与するだけでなく、研究の総合化が進むにつれて、それぞれの有効性も明らかになってゆくことを信じている。

なお、分科会形式をとって行った『共益貸本社』目録の分析は、別途まとめて「日文研叢書」として刊行する予定である。

私個人の研究としては、この都合四年間の共同研究の進展のなかで、『日本の「文学」概念』（作品社、一九九八）を基礎に日本近代における「芸術」および「歴史」概念とその編成上の日本的特徴を明らかにする試みをまとめることができた（『「芸術」概念の形成、象徴美学の誕生』、鈴木貞美・岩井茂樹編『わび、さび、幽玄——「日本的なるもの」への道程』水声社、二〇〇六、第一章、「日本における『歴史』の歴史——ひとつのプロブレマティクとして』、『日本研究』35集、二〇〇七）。また、『生命観の探究——重層する危機のなかで』（二〇〇七）の随所に、その他の成果を盛りこむことができた。

そして、この小特集の最初に、二〇〇七年度秋、北京大学でのシンポジウム「東アジアにおける近代諸概念の生成と展開」で行った基調報告を掲載する。これは、研究代表者を務めたゆえの成果だからである。